

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00773

研究課題名（和文）ハイフレックス型授業の相互行為検証とPCシミュレーションに基づく実践応用

研究課題名（英文）Verification of Interaction in the HyFlex Class and Application to Educational Practice based on PC Simulation

研究代表者

砂岡 和子（Sunaoka, Kazuko）

早稲田大学・政治経済学術院・名誉教授

研究者番号：70257286

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の初修中国語教育に適したハイフレックス型授業の有効性を検証することを目的とし、国内外の先行研究を参照してモデルの構築と実践を行った。各所属機関で教室同期型対面授業と自宅からの同期型遠隔授業を組み合わせたハイフレックスクラスを実施し、その録画を収録して授業効果を分析した。担当教員による評価の結果、組織はハイブリッド型授業に適したインフラ環境の整備、授業者は対面とオンラインモードの双方に同質の教育を保障する授業デザイン力、学習者には自律学習能力の向上が求められることが明らかになった。また、教員・学生・教材間のインタラクションを促進する授業方略と継続的サポートの必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ハイフレックスモデルの理論研究と実践に基づき、日本の初修中国語教育に最適なハイフレックス型授業の有効性を検証した。対面とオンラインモードの同期配信の課題を明らかにし、教員と学生の発話行動分析によって、授業改善には各ステークホルダーの協働が不可欠であり、ハード・ソフト両面で教育資源の有効管理が重要な課題となることを示した。少子高齢化の課題を抱える日本において、ハイフレックスの柔軟な学習形態の継承発展は、質量両面で大学教育の国際化と大学運営基盤の維持強化に繋がることを主張した点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the effectiveness of HyFlex classes tailored to beginner Chinese language education in Japan. Based on prior research conducted both domestically and internationally, we developed and implemented an appropriate model. HyFlex classes, which combine synchronous face-to-face classroom sessions with synchronous remote learning from home, were conducted at each participating institution. These classes were recorded, and their effectiveness was analyzed. Evaluations by the instructors revealed several critical findings. Institutions need to establish infrastructure suitable for hybrid classes. Instructors must design lessons that ensure equal quality of education in both face-to-face and online modes. Additionally, learners need to improve their autonomous learning skills. The study also highlighted the necessity of lesson designs that promote interaction among teachers, students, and teaching materials, along with the need for continuous support.

研究分野：中国語教育

キーワード：HyFlex Class Hybrid teaching Class Action Research Interaction Design Teaching presence Learner presence Transcription Code Switching

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ハイフレックス (Hybrid-Flexible Course : HyFlex) 型授業は、対面、同期オンライン、非同期オンラインの形式を提供する授業デザインであり、欧米では 30 年近くの研究実績がある。日本でも COVID-19 禍による対面授業と感染リスクの両立を目指す試みとして、ハイフレックス型授業が注目されるようになった。本研究はハイフレックス授業の有効性を検証し、教員・学生双方にとって拡張性と持続性に優れた授業運営方式であることを科学的指標で示すべく本研究に着手した。ハイフレックス型授業の課題は、対面とオンライン受講生に同質の授業を保證する科学的指標の不在にある。我々はハイフレックス型授業の Host (教師・インストラクター) と Remote (学習者) 間の相互対話距離が最適となるモデルを求めるため、対面・非対面場面で教員・学習者間で交わされる相互行為の分析を進め、その関連データからハイフレックス型授業の質保證のための指標を作成することを目指した。ところがコロナ禍収束とともに大学授業を対面に戻す動きが加速したことで、研究期間の後半では本研究分担者が自校でのハイフレックス授業を実施できなくなった。また、外国語授業活動のマルチモーダル情報の収集と分析には多額の経費が必要であり、科研費の負担能力を超えることが判明した。そこで令和 4 年度以降、当初の課題計画を修正し、対面授業の観察を主に分析を進め、初年度収録済みのハイフレックス授業録画分析結果を活かして研究を進めた。

2. 研究の目的

2-1. ハイフレックス型授業ローカライズの最適化検証

日本の外国語教育に適したハイフレックスモデルを探るため、先行実践例と研究の知見を参照し、実践データの分析を行う。具体的には、北米や豪州などの先行実践例を参考にしながら、日本の大学初修中国語教育に最適なハイフレック型授業を実施し、その効果を検証する。

2-2. 教育の質保證のための科学的指標の確立

対面とオンライン受講生に同質の授業を提供するため、教員と学生間のインタラクションを分析し、指標を作成する。対面・非対面場面での教員と学生間の相互行為活動をデータ化し、そのインタラクションの質の検証によって、対面とオンラインで同質の授業を提供するための科学的指標を求める。

2-3. 教育資源の有効活用と改善

ハイフレックス授業実施に欠かせない電子教材や LMS の配置と共有に関する分析を行う。そのための Zoom や Moodle、メタバース、VR など新しい教育ツールの学習効果を調査し、持続可能な外国語教育の実現に向け Good Practice を示す。

3. 研究の方法

3-1. 先行実践例と理論文献の調査

北米生まれのハイフレックス教育を日本の大学初修中国語教育に適した実践モデルとするため、先行実践例および関連理論文献を参照し、代表的著作である (Beat ty2019) を一年かけて輪読した。研究期間後半では、ハイブリッド型や対面型授業に範囲を広げ、関連著作の情報共有を行った。

3-2. ハイフレックス型中国語授業の実施と成果検証

2021 年度秋学期に、日本の 3 つの大学で初修中国語のハイフレックス授業を実施し、各校の実施条件に応じて数本の録画を収録し、相互評価を行い、詳細な分析を行った。FLint system (Foreign Language interaction system : 外国語相互作用分析システム) や COI (Community of Inquiry : 探求の共同体) の枠組みを参照し、

オンライン授業における教員と学生の発話行動を定量化し、授業デザインが学生の学習体験に与える影響を調査した。

3-3. アンケート調査と継続的フィードバック

教員および学生を対象に大小様々な規模のアンケート調査を実施し、授業分析および学生の反応を検証し、結果を次の授業実践に反映した。比較的規模の大きいアンケート調査では、担当教師の視点からハイフレックス授業実施の課題やコストについて評価を依頼した。

3-4. 学習活動および教材設計と評価

授業録画分析と教員や学生へのアンケート調査を通じ、ハイフレックス授業実施に適した電子教材やツール、教学活動を支援する学習管理システム構築の必要性を痛感し、そのための教育資源再配置とこれらを有効活用した授業例を紹介した。

3-5. 国際共同による外国語教育法の再検討

ハイフレックス型授業モデルのローカライズに必要な教育方略を検討するため、国内外の第二言語習得 (Second Language Acquisition : SLA) および外国語教育政策の専門家と討論を重ね、成果を論文にまとめ共同執筆を行った。

4. 研究成果

4-1. ハイフレックス型授業のローカライズと最適化検証の研究成果

令和 3 年度は国内外のハイフレックス型授業に関する先行研究や機関の報告を渉猟し、輪読形式で(Beatty 2019) を読み進めるなど、理論面での知見の蓄積を行った。実践面では、教室同期型対面と自宅等からの同期型遠隔を組み合わせたハイフレックスクラスの実施に向け、理論と実践の両面から取り組んだ。

4-2. 日本における中国語ハイフレックス授業の評価

2021 年度秋学期に実施した 3 大学での初修中国語ハイフレックス授業の成果を、主に担当教員のアンケート結果に基づき評価を行った。Beatty (2019) および浦田 (2022) を参照して評価項目を策定した。大学授業のステークホルダーを組織・教員・学生に三分類し、三大学の担当教員が各自の実践知に基づき、ハイフレックス授業のメリットとデメリットを評価した。その結果、各機関は継続してハイブリッド型授業に適したインフラ環境の整備構築と通信機器運用支援を行う必要があること、教員は事前に対面と遠隔両モードの学習活動やインタラクションをデザインした教材作成やタスク設計が不可欠であること、学生はオンライン学習時の時間管理や学習方法の調整能力が求められることなどの課題が明らかになった。

4-3. 様々なハイブリッド型授業の実施

令和 4 年度は、研究分担者が自身の教育機関でタイプの異なるハイブリッド授業を実施し、分析を進めた。大学ハイフレックス型授業で地域文化をテーマにした多言語 PBL 国際協同コースでは、縄文・アイヌ文化の博物館ガイドをテーマに、学習成果物と学習者の認識を質的に分析した結果、学習者は国際協同学習環境でのグローバルな学習活動の有効性を明らかにした。CBI タイプのハイフレックス中国語授業では、参加者のインタラクション活性化に最適なデザインを探求した。同時に対面・遠隔同時配信の支援課題や通信環境、および中国語教育独自の課題も浮き彫りになった。

4-4. 四大学共通学生アンケート

令和 4 年度春学期の対面授業に対する四大学共通フォーマットによる学生アンケート (N=215) を実施し、教員と学生の対話活動について分析を行った。結果から、更なる授業効果向上にはクラス規模や授業デザインの

見直しのほか、担当教員の教育観の更新や学生の自主性の育成が必要であることが示された。三大学中国語教員によるハイフレックス授業評価のアンケート結果は上掲 4-2. に記示した。

4-5. 教育資源の有効活用と授業改善

最終年の令和 5 年度は、初年度に実施したハイフレックス授業の考察を 4 本論文化し、それぞれ国内外の学会で研究成果報告と学術誌掲載した。また、ハイフレックス授業を支える言語教育の基本課題に取り組み、熟練教員の初級中国語授業中の発話特徴、および習得目標言語 (L2) と学習者の母語 (L1) の Code Switching に関する調査を進め、学会で報告した。

4-6. 外国語教育法の国際共同討論

令和 3 年度は世界中がコロナ禍による緊急オンライン教育の試行期であり、日本の大学の対応に関する論文を英語と中国語で論文化し、米国・中国・台湾の研究者を招聘し、それぞれの地域におけるオンライン授業の経験を共有した。令和 4 年度は北京の中国語教育の専門家を招き、インタラクション方略に関する公開座談会を開催して、学習者との相互活動の中で基礎技能を習得する教授法について議論し、成果を座談会記録として公開した。令和 5 年度は中国の大理大学 & 上海外国語大学の英語教育研究者とともに、中国と日本の英語早期教育の政策と理念に関する共著を、小学校と大学の外国語教育の資源配置についての共著を執筆した。国際共同による研究は語学教育を取り巻く政治的・文化的環境の差異とともに、互いの長所も顕在化し、観察に新しい視点をもたらした。

5. 結びに替えて

国土面積が広く、学習者の構成が多様であるほど柔軟な教育手法が求められ、遠隔教育の需要が高まる。米国や豪州で遠隔教育が長い歴史を持ち、中国でもオンライン教育が興隆しているのはこのためである。オンライン教育は緊急事態や遠隔地でも受講の選択肢を提供し、教育機関の広域化に寄与し、大学教育の国際化と基盤強化に繋がる。日本は遠隔教育の導入が遅れたが、過去 3 年余の緊急オンライン教育で、多くのメリットが見直された。オンラインやハイブリッド授業は、学習ルートと教材の多様化、学習時間の増加により、学習者の成績は対面授業と同等かそれ以上である (Means, et al., 2010)。我々のハイフレックス授業も同様に学生の成績が低下することはなかった。

遠隔教育はコースへのアクセスと自己管理の利点を提供するが、電子メディアのみの対話は学習経験が制限される。(Beattie & James, 1997) 以来、遠隔 (オンライン) 教育で得られる経験と成果はトレードオフの関係にあることが指摘される。遠隔教育はコースへのアクセスと学習自己管理の利点を提供する一方で、電子メディアを介する対話だけでは、学生の学習経験を制限する可能性が高い。複雑な組織でのコミュニケーション能力育成には、多様なコンテンツ配信と対面での相互作用が必要である (Saunders & Dryden, 1998)。ハイフレックス型授業は、オンラインと対面の利点を併せ持ち、低コストで実施可能な教育手段である。その成功の鍵は、インフラ環境の整備、授業デザインと教授方略、学生の自律能力であることは、本研究でも明らかになった。ハイフレックス授業の最大の課題である、対面とオンラインで同質の教育内容を保障できるか否かは、まさに上掲 の条件を整えられるかにかかっている。 に関しては、生成 AI や電子教材の活用を含め、対話活性化のための教授技量の向上が望まれる。 では、日本の学生も自律的学修能力を身につけつつあるが、受動的学習文化を一気に変えるのは難しい。多くのアジアや東ヨーロッパ、イスラム諸国でオンライン教育が浸透しにくいのは、教師が学生の学習に完全に責任を持つパターナリズムが指摘される。これらの地域では、自発的な質問やフィードバックが少なく、対話中心の授業は受け入れにくい。技術的にいかに優れた

オンラインコースでも文化的・宗教的な認識の境界を越えるには時間を要する (SCaLLON & SCaLLON, 1994 : Archee & Saunders, 2001)。 のインフラ環境に関しては、我々のハイフレックス授業評価では、各所属機関の整備不足が指摘された。日本の大学は対面授業再開にシフトし、ハイブリッド・ティーチング・アプローチ継承には消極的である。COVID-19 の位置づけが第 5 類感染症へ移行し、対面授業が加速する現在、オンライン教育のためのインフラ整備や人材育成支援が止まる恐れがある。対して感染予防策のためのマスク着用や教室人数制限は続き、外国語教育に不利な環境は変わらない。ハイフレックスモデルは学習者の選択を尊重し、教員と学生の自主的な取組をベースとするが、受講選択権の範囲は地域や機関によって異なる。必ずしも Beatty (2019) のようにオンライン授業提供を学生の私用まで許容せず、社会的非常時に限定する方式もある。今後は生成 AI を含む教育資源の管理と学修環境の構築が重要課題となるだろう。少子高齢化の日本では、ハイフレックスの継承発展が大学教育の国際化と基盤強化に繋がる。三年余の緊急オンライン教育を通じて日本の学生の自律性も向上してきた。ハイフレックスを常態化するため、教育機関はインフラ整備と教員の研修を継続し、学習者の自律学習を促進する必要がある。我々は新規科研課題においてハイフレックス型授業の遺産を継承発展させ、引き続き外国語教員の授業力向上支援のための研究に繋げていく。

参考文献 (本科研メンバーによる論文は除く)

- Beatty, B.J. (2019) Hybrid-Flexible Course Design: Implementing Student-Directed Hybrid Classes, EdTech Books
- Beattie, K. & James, R. (1997). Flexible coursework delivery to Australian postgraduates: How effective is teaching and learning?, Higher education, Vol.33 (2), p.177-194, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers ABI/INFORM Professional Advanced.
- Archee, R., & Saunders, S. (2001). Converging Modalities for Distance Education in Professional Communication: Implications, Journal of Open, Flexible and Distance Learning, Vol. 6, No. 1, Distance Education Association of New Zealand, from Flexible Delivery.
- Means, B., Y. Toyama, R. Murphy, M. Bakia & K. Jones. (2010). Evaluation of Evidence-based Practices in Online Learning: A Meta-analysis and Review of Online-learning. Studies. Washington, D.C.: U.S. Department of Education.
- Saunders, S. & Dryden, J. (1998). Language, culture and communication: Self-managed learning materials (Graduate Diploma in Vocational Education and Training). Sydney: Flexible Learning Unit, Faculty of Education, University of Technology, Sydney.
- SCaLLON, R. T., & SCaLLON, S. W. (1994). Face parameters in East-West discourse. In S. Ting-Toomey (Ed.), The challenge of facework: Cross-cultural and interpersonal issues (pp. 133-157). Albany: State University of New York Press.
- 浦田悠(2022)ハイブリッド型授業に関する知見の整理とFD研修の実践, 大学教育研究, 第30号, pp.21-34

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 6件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 杉江聡子, 王松, 曲明, 砂岡和子	4. 巻 -
2. 論文標題 初修外国語のためのHyFlex授業デザインの最適化 北米型コース理念と日本の4大学の実態比較	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育システム情報学会 (JSiSE) 第2回研究会「ICTを活用した学習支援と教育の質保証/一般」報告書	6. 最初と最後の頁 129-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉江聡子, 阿部志乃, 砂岡和子	4. 巻 -
2. 論文標題 選ばれる語学教師を支える教育資源配置—小学校英語と大学中国語の授業デザイン	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 2024言語教育エキスポ予稿集+	6. 最初と最後の頁 99-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Kazuko Sunaoka, Jiayan Zeng, Shino Abe	4. 巻 -
2. 論文標題 To run faster or to run further? Comparison between China and Japan in Foreign Language Education	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 2024言語教育エキスポ予稿集+	6. 最初と最後の頁 79-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 砂岡和子	4. 巻 2
2. 論文標題 教學模式的当地化思考—以日本Hyflex 漢語課為例	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 國際中文教育前沿雜誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sugie, Satoko	4. 巻 -
2. 論文標題 The AI-Supported Instructional Design in PBL Integrating Chinese Language Learning and Multimedia Creation	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of the 31st International Conference on Computers in Education	6. 最初と最後の頁 746-752
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂岡和子, 徐勤	4. 巻 -
2. 論文標題 生成系AIと初級外国語学習者のCode Switching発話「聴取」パフォーマンス	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 電子情報通信学会信学技報教育工学研究会 (ET) 「教育学習支援システムの開発と運用」予稿集	6. 最初と最後の頁 33-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 砂岡和子	4. 巻 1
2. 論文標題 Zoom Chatに見るWe-Mode-中国語話者のMulti-Agent Interaction	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語処理学会第28回年次大会予稿集	6. 最初と最後の頁 1916-1920
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kazuko SUNAOKA, Chui Ling TAM	4. 巻 1
2. 論文標題 Joint Utterance Construction Factors for Chinese Speakers in Zoom Chat - Emotional Gratitude Expressions and Information Sharing	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The 2nd Xiamen University-Purdue University International Forum on Teaching Chinese as a Second Language	6. 最初と最後の頁 7-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 杉江聡子	4. 巻 1
2. 論文標題 中文教師、T.A.和学生三位一体式HyFlex互動教学法設計	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 数字化国際中文教育	6. 最初と最後の頁 89-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Qu Ming	4. 巻 1
2. 論文標題 A case Study of Hyflex Implementation in a Chinese Language course Focusing on Students' Perceptions of the Community of the Inquiry	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 数字化国際中文教育	6. 最初と最後の頁 376-387
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂岡和子	4. 巻 1
2. 論文標題 Zoom Chatに見る要請応答と感謝感情表現-中国語話者のMulti-Agent Interaction	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人工知能学会2022第95 回言語・音声理解と対話処理研究会(SIG-SLUD-095)	6. 最初と最後の頁 89-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂岡和子, 譚翠玲, 向凌萱	4. 巻 1
2. 論文標題 Code Switchingによる多言語混在日本語資源と言語処理	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語処理学会第29回年次大会ワークショップ予稿集	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 砂岡和子, 譚翠玲	4. 巻 1
2. 論文標題 テキストマイニングで知る語学教師の発話嗜癖	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語処理学会第29回年次大会予稿集	6. 最初と最後の頁 1612-1615
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 曲明, 砂岡和子	4. 巻 1
2. 論文標題 大学初修中国語教員3つのジレンマとその解法 FLint systemによる大人数クラスHyFlex授業分析を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語教育EXP02023予稿集	6. 最初と最後の頁 86-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉江聡子	4. 巻 58
2. 論文標題 ウィズコロナ・アフターコロナの中国語教育 - 外国語×ICT×専門教育でマルチモーダルなコミュニケーションスキルを伸ばす	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国21	6. 最初と最後の頁 105-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sunaoka, K., Sugie, S.	4. 巻 -
2. 論文標題 How to Upgrade Online Chinese Language Teaching at Japanese Universities after Corona	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the 11th International Conference on Technology and Chinese Language Teaching	6. 最初と最後の頁 97-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂岡和子	4. 巻 -
2. 論文標題 中文教學的設計與方法 高校師生的期待與現狀	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本中国語学会第71回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 19-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂岡和子	4. 巻 -
2. 論文標題 反思日本高校線上教學	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本中国語学会第71回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂岡和子	4. 巻 -
2. 論文標題 Zoom Chatに見るWe-Mode-中国語話者のMulti-Agent Interaction	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語処理学会第28回年次大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 1916-1920
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 杉江聡子	4. 巻 -
2. 論文標題 以科技為媒介的教學設計—外語及觀光學的CBI實踐與評估	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本中国語学会第71回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 31-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王松	4. 巻 -
2. 論文標題 混合式教学環境下基本心理需求与学習投入的關係探析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本中国語学会第71回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 34-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂岡和子	4. 巻 -
2. 論文標題 中文教学的設計与方法 高校師生的期待与現状	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本中国語学会第71回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 19-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 砂岡和子	4. 巻 -
2. 論文標題 中文教学的設計与方法 高校師生的期待与現状	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本中国語学会第71回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 19-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 砂岡和子
2. 発表標題 人工智能在學生個性化學習中的應用與互動特徵
3. 学会等名 世界漢語教學學會2023年高級講習班 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 砂岡和子
2. 発表標題 教師在實現人工智能與教育深度融合中的關鍵作用
3. 学会等名 世界漢語教學學會2023年高級講習班（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 砂岡和子
2. 発表標題 教育機構經營策略對教育智能化的關鍵指導作用
3. 学会等名 世界漢語教學學會2023年高級講習班（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 砂岡和子
2. 発表標題 人工智能在中文教學資訊化發展中的角色探討
3. 学会等名 世界漢語教學學會2023年高級講習班（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 砂岡和子
2. 発表標題 Zoom Chatに見るWe-Mode-中国語話者のMulti-Agent Interaction
3. 学会等名 言語処理学会第28回年次大会, テーマセッション4: 談話研究と対話システム研究
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuko SUNAOKA , Chui Ling TAM
2. 発表標題 Joint Utterance Construction Factors for Chinese Speakers in Zoom Chat
3. 学会等名 The 2nd Xiamen University-Purdue University International Forum on Teaching Chinese as a Second Language (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 砂岡和子, 杉江聡子, 王松, 曲明
2. 発表標題 学生を指す 潜在的期待からの教学再考
3. 学会等名 日本中国語学会関東支部例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Qu Ming
2. 発表標題 A case Study of Hyflex Implementation in a Chinese Language course Focusing on Students' Perceptions of the Community of the Inquiry
3. 学会等名 The Association for Modernization of Chinese Language Education
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉江聡子
2. 発表標題 中文教師、T.A.和学生三位一体式HyFlex互動教学法設計
3. 学会等名 The Association for Modernization of Chinese Language Education
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉江聡子
2. 発表標題 初修中国語Hyflex授業における相互作用の特徴及び最適化の検討
3. 学会等名 言語教育EXP02023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 曲明、砂岡和子
2. 発表標題 大学初修中国語教員3つのジレンマとその解法 FLint system による大人数クラス HyFlex 授業分析を通して
3. 学会等名 言語教育EXP02023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 砂岡和子
2. 発表標題 Zoom Chatに見る要請応答と感謝感情表現-中国語話者のMulti-Agent Interaction
3. 学会等名 人工知能学会第95 回言語・音声理解と対話処理研究会(SIG-SLUD-095)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 砂岡和子, 譚翠玲
2. 発表標題 テキストマイニングで知る語学教師の発話嗜癖
3. 学会等名 言語処理学会第29回年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 砂岡和子, 譚翠玲, 向凌萱
2. 発表標題 Code Switchingによる多言語混在日本語資源と言語処理
3. 学会等名 言語処理学会第29回年次大会ワークショップ
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Sunaoka, K., Sugie, S.
2. 発表標題 How to Upgrade Online Chinese Language Teaching at Japanese Universities after Corona
3. 学会等名 the 11th International Conference on Technology and Chinese Language Teaching (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 砂岡和子, 劉士娟, 王瑞烽, 杉江聡子, 王松, 王怡人
2. 発表標題 中国語教育のデザインと教授法 大学教員と学生の期待と現状
3. 学会等名 日本中国語学会第71回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 砂岡和子
2. 発表標題 Zoom Chatに見るWe-Mode-中国語話者のMulti-Agent Interaction
3. 学会等名 言語処理学会第28回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 砂岡和子
2. 発表標題 オンライン教育の成果継承への道筋 - 米中の成功事例に学ぶ
3. 学会等名 早稲田大学現代政治経済研究所「言語データ分析研究会」第1回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 曲明
2. 発表標題 Hyflex形式中国語授業の実施及びその授業評価
3. 学会等名 日本中国語学会北海道支部
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Shijuan Liu (Eds.), Kazuko SUNAOKA , et, al.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 National Foreign Language Resource Center, University of Hawaii	5. 総ページ数 270
3. 書名 Online Chinese Teaching and Learning in 2020	

1. 著者名 Shijuan Liu (Eds.), Sunaoka, K., Sugie, S., M. Zahradnikova., Ch. Lin., C. Romagnoli., V. Ornaghi., Y. Ma., S. Too., W. Jiang., M. Li., S. Lee., Ch. Song, S. h. Zhang., Ch. Wu., L. Huang., B. Mu., Ch. Ma., Y. Tian., Y. Wang., H. Zhan.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Macmillan Publishers Ltd.	5. 総ページ数 501
3. 書名 Teaching the Chinese Language Remotely: Global Cases and Perspectives.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

如何教好漢語語音基礎和基本句型？（座談会記録．中国語）
<http://www.f.waseda.jp/ksunaoka/%E5%BA%A7%E8%AB%87%E4%BC%9A%E8%A8%98%E9%8C%B2.pdf>
 これだけは身に付けて欲しい発音と初級文型の教えかた（座談会記録．日本語簡訳版）
<http://www.f.waseda.jp/ksunaoka/%E5%BA%A7%E8%AB%87%E4%BC%9A%E6%97%A5%E8%A8%B3.pdf>

中国と日本の英語早期教育の政策と理念および、小学校と大学の外国語教育の資源配置に関する共同討論を行い、共著を学会発表し、共著論文を執筆した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	杉江 聡子 (Sugie Satoko) (90795048)	札幌国際大学・観光学部・准教授 (30116)	2024年より北海学園大学人文学部 助教授
研究分担者	曲 明 (Qu Ming) (60727064)	室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授 (10103)	
研究分担者	王 松 (Wang Song) (80580654)	関西外国語大学短期大学部・英米語学科・准教授 (44417)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 中国語初級課程のインタラクティブ方略	開催年 2022年～2023年
------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
中国	北京語言大学		
中国	上海外国語大学	大理大学	